HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ボランティア活動の継続・発展とボランティア組織の構造 ： 福祉ボランティア活動を事例に
Author(s)	宋, 美英
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 109, 51-80
Issue Date	2009-12-21
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.109.51
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40218
Type	departmental bulletin paper
File Information	109_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院
紀要　第 109 号　2009 年 12 月

ボランティア活動の継続・発展と ボランティア組織の構造

―― 福祉ボランティア活動を事例に ――

宋　　美　英*

An Investigation of Factors for Sustainable Development of Voluntary Organizations:

The Analyses of “Volunteer Space” in a Grass-root Group Involving in Social Welfare Activites

Mi Young SONG

【要旨】本研究の目的は，地域社会のニーズに応える「ボランティア組織」が活動を継続的に行う際に必要になる，会の「ミッション」，会員の「リクルート」，活動経費，活動をすすめるための「学習」についてメンバーがどのように考えているのかを検討することである。札幌市の「Ｆボランティア」のメンバーを対象にした配布調査の分析に基づき，メンバーを４類型（コアメンバー，周辺Ⅰ，周辺Ⅱ，外延）に区分したうえで，詳細な面接調査を行った。その結果，ボランティア組織の「ミッション」や会員の「リクルート」など組織の継続・発展に関わる重要な問題について意見の不一致や対立がみられ，それは，とくにコアメンバーの内部において意見の違いがより顕著であることが明らかになった。組織の核であるコアメンバーは，意見の不一致や違いに気づき，意思疎通する機会を設け，会の課題について会全体で意見を交換する場を持つことが求められる。

【キーワード】ボランティア組織，マネジメント，継続性，４類型，意志疎通

１．問題の所在と課題

ボランティア活動は，「自発性」，「無償性」，「公共性」という３つの性格をあげて，その特性が語られることが一般的である。これらは，先進国や開発途上国を問わず上げられる特性であるが，この３つの特性以外にも，連帯性，社会性，補完性，継続性（持続性），組織性などが上げられこれらのボランティア活動の特性は，国家，社会，活動領域などによって多様に定義される。ボランティア活動の特性のなかで特に「継続性」について先行研究では以下のように述べられている。

中島（1999）[1]は，ボランティアの諸特性について，自発性，主体性，無償性はボランティアの基本的な姿勢に視点を置いたものであるのに対し，公共性，利他性，福祉性，社会性は，ボランティア活動の目的に視点を置いたものであり，「継続性」は連帯性とともにボランテ

* 北海道大学大学院教育学院生涯学習計画講座博士後期課程（生涯学習計画研究グループ）

ィア活動を進めるうえでの視点からの表現であり，さらに先駆性，開拓性はその機能の視点からの表現であるとしている。

韓国ボランティア団体協議会（2001）[2]では，ボランティア活動の「継続性」は，地域ニーズに応えて活動を進めようとする際に必要になるものであり，地域社会に生じる様々な問題を解決し，予防するために働きかけていくうえで重要であると述べている。またそれは，「即興的かつ，一時的な行事として終わるものでなく，計画的な過程によって活動を行うことであり，過去の単純な住民参加や隣人に対する善意的に行う活動とボランティア活動を区分する特性である」と指摘している。

そして，イ　ソンロク（2005）[3]は「継続性」について，単純に他人を助ける活動ではなく，「助け合いを媒介に変化をはかる活動であり，一人で行える個人的な活動ではなく，ボランティア，受け入れ先，コーディネーターなどの人たちとともに遂行する活動である。したがって，手続きや過程が重要な活動である」と述べている。

田尾（2001）[4]は，一人ひとりのボランティアを泡にたとえ，その泡で構成された組織を積極的に評価しなければならないのがボランティア活動であり，またその社会はその大量の泡を必要としているとし，もともとボランティアは「継続性」を維持することが難しい活動であると指摘している。

また大阪ボランティア協会（2000）[5]は，ボランティア活動が自己の持つ能力や時間を課題解決を求めている相手に継続的に提供し，支援する活動であり，その継続性は相手との責任応答的な関係を維持し，福祉的な課題の解決に欠くことのできないものであると述べている。

内海・入江・水野（1999）[6]は，ボランティアが他者と集団を形成し活動を行うのは，活動の継続性と安定性を向上することができるからであると述べている。さらに桜井（2007）[7]は，ボランティア活動の継続は，活動を行うボランティアにはたいした問題にはならないが，活動者を取り巻くボランティアグループのリーダーやNPOのボランティアコーディネーターなどの諸周辺の対象になりがちであると述べている。このように従来のボランティア研究においては，ボランティア活動はその「継続性」が難しい課題であるとされる一方で，ボランティア活動としては大変重要なことであると述べられている。

筆者がボランティア活動の「継続性」について関心をもったのは，以下のような韓国におけるボランティアの動向が理由である。韓国においては，1980年代の2つの大会（1986年のアジア大会，1988年ソウルオリンピック）を契機にボランティア活動への関心が高まったこと，また1995年からの地域福祉の重要性が打ち出され，地域福祉の拠点施設として地域社会福祉館[8]が増加し，行政と市民とのパートナーシップが求められるようになった。これらの動向を背景に，1997年の教育改革により，中・高校生のボランティア活動の義務化，また大学教育におけるボランティア活動の教養科目や必修科目の導入が行われた。また，高齢者ボランティア人口が増加して，ボランティアを体験するものが増えていた。その一方で，活動をやめてしまう「中途脱落」問題がボランティアを受け入れる行政や民間機関によって重視されるようになり，その活動を「継続」させるための取り組みが行われた。

しかし日本では，ボランティア活動の「自発性」や目的としての「自己実現」が強調され，ボランティア活動への参加者の持続的な拡大は重視されるが，ボランティア活動をやめようとする人をいかに減らすか，ボランティア組織をその活動人数も含め，いかに維持発展させていくかなどについては関心が薄く，ボランティア活動への参加や離脱は，ボランティア活

動の「自発性」にもとづくのもで，ボランティアがその活動をやめたり，活動の頻度を少なくすることがことさら問題とされることなく，自発性に基づく自由な活動と相手の状況に規定される活動との矛盾や，利他主義と自発主義との間の矛盾などとして捉えられ，「ミクロレベルのミスマッチ」[9]，「自発性のパラドクス」[10]，「ボランティア活動の辛さ」[11]，「不信と疲労の悪循環」[12]などを要因として離脱や消極性が生じると考えられてきた。このように韓国の「中途脱落」への関心の高さと日本におけるボランティア活動に対するとらえ方の違いに着目し，日本の「ボランティア組織」では，このような問題についてどのように考えているのかについて検討する。

今日，ボランティア活動への関心が高まっていると同時に高齢者の増加，地域の施設の増加[13]などにより，ボランティアの役割が一層重要になっている。2001年の全国ボランティア活動者実態調査[14]は，65,320団体・グループが対象となった。現在は，もっとも多くの団体・グループが立ち上げられ地域における活動を進めていることが予測される。このように多くの団体・グループが活動を行っているにもかかわらず，ボランティア活動の「継続性」について，これらを事例とした調査・研究した論文や文献は多くない。

そこで，本稿では，「Ｆボランティア」を事例に活動の継続性をはかるためのさまざまな諸困難の解決やメンバーとなるボランティアの入退会などについて，ボランティア組織ではどのように把握され，解決・克服されているかを考察する。

１－１．研究方法と研究対象の概要

調査の対象としては，札幌市Ｔ区を活動拠点として10年以上にわたり，活動を続けている「Ｆボランティア」を取り上げ，その会のメンバーの活動に対する意識などを中心にボランティア活動に対する継続性を明らかにする。

１－１－１．研究方法

筆者自身が「Ｆボランティア」の活動に参加しながら，グループの成立や活動の経緯について実際の資料を収集し，リーダーたちに聞き取り調査をおこなった。また定例会や総会，さらに具体的な活動に参加する「参与観察」を行うとともに，ボランティア活動の継続に関わるメンバーの具体的な活動への参加と入会した動機や活動の継続についての意識を中心にたずねる調査票をメンバー全員を対象に配布した（35名に配布し，26票が回収された）。またScheierのボランティアメンバーの「階層性」[15]を基にして活動への参加の度合いによりメンバーを４つの類型に区分した上でより詳しい面接調査を実施しており，それぞれのメンバーが，下記の事柄①から④までについてどのように考えているのかを分析し，考察を行った。

①「ボランティア組織」のミッションと関わる，地域のニーズに応える「会の目的」
②ボランティア活動の特性の一つの「無償性」とも関わる「交通費」の負担
③「ボランティア組織」を継続的に維持・運営するための「ボランティアリクルート」（メンバーの確保・拡大）
④ボランティア活動を行う際に関連する「学習」

１－１－２．「Ｆボランティア」の経緯

「Ｆボランティア」は，1993年にＴ区にある「医療法人Ｋ病院」が組織したボランティアグ

ループから出発する。立ち上げられた当時は，病院職員のＩ氏が代表を担い，75名のメンバーから始まった（表１）。また事務局をＫ病院の「医療事務サービスセンター」に置き，病院職員である専門のコーディネーターの指導・援助のもとで活動が行われたが，1998年に，病院の経営・財政問題を理由に「独立」を余儀なくされた。その後は，メンバーの一人であるＮ氏がリーダーになり，またコーディネーターの役割を担わなければならなくなった。それまでの病院から提供されていたバックアップがなくなることにより活動資金の不足などのさまざまな危機に直面することになった。「会」がその存続のために，より積極的に地域のニーズに応えること，すなわち地域施設のイベントや行事に関わる援助を行うことに活動の領域を拡大し，メンバーたちが自らの負担を増やしながら活動を行うなど，行政とパートナーシップを図る取り組みにもその活動範囲を広げてきた。

2000年から始まった介護保険制度によるホームヘルパーの派遣が広がり，従来ボランティアとして実施していた高齢者への訪問介護などが減少したことから活動は個別援助活動から施設ボランティアへと重点を移すことになった（表３）。

「Ｆボランティア」の会員数は，1993年の発足当時は75名だったのが，2005年現在は，35名に減り，また構成員は男性より女性の方が多く，その中でも50～60代の女性が大半を占める（表２）。

表１．「Ｆボランティア」会員数の推移と代表者

年　度	1993年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
会員数	75名	?	34名	45名	38名	32名	33名	38名	36名
代　表	I氏	N氏	N氏	S氏	N氏	N氏	N氏	N氏	T氏

注）1993年から2005年の定例会資料より

表２．「Ｆボランティア」会員の年齢別構成（2005年度基準）

性別･年代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
男性	0	0	1	1	3	1	6
女性	2	1	12	12	2	0	29

注）2006年総会資料より

１－１－３．「Ｆボランティア」の活動内容

「Ｆボランティア」の活動内容は，Ｔ区内の高齢者や障害者を対象にする家事援助や音楽・スポーツ支援，外出介助といった「個別援助活動」やＫ病院前の市道やＪＲ手稲北口の花壇の手入れなどの「環境美化活動」，区内の施設やイベントなどの手伝い活動，託児サポート活動である。その他に総会・定例会を行うとともに研修会も実施している。

表3．「Fボランティア」活動実績

活動	個別活動		美化活動		行事活動	託児サポート	合計
年度	件数	延べ人数	件数	延べ人数	延べ人数	延べ人数	
1998	12	212	17	180	52	0	444
1999	12	187	27	89	55	113	444
2000	13	382	27	102	69	204	757
2001	8	176	28	107	65	229	577
2002	5	158	17	83	171	126	552
2003	7	173	15	86	216	164	639
2004	11	70	22	168	353	141	732
2005	3	126	28	213	352	150	841

注）1998年から2005年の定例会・総会資料より

2．「Fボランティア」の配布調査について

会の全メンバー35名を対象に調査表を配布し，そのうち26票が回収された。配布調査の結果は以下のようになる。

2－1．「Fボランティア」属性

配布調査の回答者26名の構成は，女性20名，男性4名，無回答2名である（表4）。また年齢は男女合わせ，「50－59歳」の中高年期のメンバーが一番多く，その次が「65－69歳」，「60－64歳」，「70－74歳」の順になっており，「50－60代」が全体の3分の2弱を占める（表5）。

表4．性別について　（単位：人）

男　性	4
女　性	20
無回答	2
総　数	26

表５．年齢について　　（単位：人）

項　　目	人　　数
30−39歳	2
40−49歳	0
50−59歳	8
60−64歳	4
65−69歳	5
70−74歳	3
75−79歳	1
80歳以上	1
無回答	2
総　数	26

現在の職業は「専業主婦」，「無職」がほとんどであり，２名が「専門技術職」の職業に就いていた。専業主婦と無職に答えたメンバーは以前に「事務職」が一番多く，「管理職」，「販売・サービス職」であった。

表６．職　　業　　（単位：人）

項　　目	人　　数
専門技術職	2
専業主婦	14
無　職	8
無回答	2
総　数	26

２－２．ボランティア活動の現状

メンバーたちがボランティア活動をはじめたきっかけは，「社会福祉に関する研修会・イベントなどで知った」ことがもっとも多く，その次が「周りの人に（知人・友だち・家族）すすめられて」，「社会福祉協議会のボランティアセンターで知った」である。「Ｆボランティア」のメンバーたちは，社会福祉協議会の主催の研修会を通して「会」を発足され，そこにおける活動を開始したメンバーが多いため，社会福祉協議会の役割が「Ｆボランティア」の新メンバーリクルートを考える上で重要な仲介機関であるといえる。

表7．ボランティア活動のきっかけ（複数回答）　（単位：人）

項　目	人　数
周りの会員に誘われて	3
周りの人（知人など）からすすめられて	4
他団体の会員からすすめられて	1
職場・学校で知って	0
本団体の広報物（ポスターやチラシ）を見て	3
社会福祉に関する研修会・イベントなどで知って	11
社会福祉協議会のボランティアセンターで知って	4
インターネットで見て	1
その他	8
総　数	35

活動の動機は，大きく利他主義と自己重視の活動，つまり自己実現の２つに分けることができるが，「Ｆボランティア」のメンバーたちは，「社会奉仕に参加したい」，「社会問題に関心がある」の利他主義の動機より，「自分自身の学びや成長のため」，「余暇時間を活用したい」，「自分自身の知識や経験を活用したい」，「新たな経験をするために」などの自己重視の動機で活動をはじめたメンバーが多い。

表8．ボランティア活動の動機について（複数回答）　（単位：人）

項　目	人　数
社会奉仕に参加したい	10
社会問題に関心があって	4
自分の知識や経験を活用したい	6
余暇時間を活用したい	8
自分自身の学びや成長のため	17
新たな経験をするために	3
仲間や友人を得たい	1
宗教活動の一環として	0
周りの人（家族・知人）のすすめで	1
その他	2
総　数	52

また，活動の年数は，「１年以上から３年未満」と回答したメンバーが最も多かったが，「５年以上から７年未満」，「７年以上から10年未満」，「10年以上」のメンバーを合わせると回答者の半分を超えており，活動の年数が長いメンバーが多く，新しいメンバーが年々増えていく組織ではなかったことを示し，リクルートをあまり重視してこなかったことがうかがえる。

表９．「Ｆボランティア」における活動の年数　（単位：人）

項　目	人　数
１年未満	2
１年－３年未満	7
３年－５年未満	3
５年－７年未満	4
７年－ 10 年未満	5
10年以上	5
総　数	26

行う活動の頻度について，「月３回以上から８回」と答えた者がメンバーの３分の２を占め，メンバーの多くが活動を積極的に行っていることが分かる。活動の年数や頻度でわかるように，メンバーたちが，どういう魅了を感じながら活動つまり行動に移しているのかを検討する余地がある。

活動の頻度は，会の主な活動領域であった個別援助活動とは異なる施設訪問や施設行事の手伝いの回数が増加していることと関係している。

表10．１カ月に行う活動の頻度について　（単位：人）

項　目	人　数
月０回	0
月１－２回	8
月３－４回	11
月５－８回	6
月８回以上	1
総　数	26

会の運営について話しあったり，活動計画を定める定例会や総会への参加については，両方ともに「いつも出席する」と回答したメンバーが一番多く，会の運営に関心を持ち自ら関わる者が少なくないことがわかった。

表 11．定例会・総会の出席の頻度　（単位：人）

定例会の出席の頻度		総会の出席の頻度	
項　目	人　数	項　目	人　数
いつも出席する	17	いつも出席する	16
ときどき出席する	7	ときどき出席する	5
あまり出席しない	1	あまり出席しない	1
まったく出席しない	0	まったく出席しない	1
無回答	1	無回答	3
総　数	26	総　数	26

ボランティア活動の内容に対しては，「Ｆボランティア」本来の目的である「高齢者・障害者などの個別援助活動」より「施設訪問・施設行事の手伝い活動」，「環境整理活動（美化活動），「児童・青少年福祉活動（託児）」の活動を行っているメンバーが最も多かった。

表 12．ボランティア活動の内容（複数回答）　（単位：人）

項　目	人　数
クライエント（高齢者や障害者など）の個別援助活動	14
施設訪問・施設行事の手伝い活動	16
環境整備活動（美化活動）	11
児童・青少年福祉活動	4
事務および業務補助活動	2
その他	0
総　数	47

「Ｆボランティア」意外の団体に，他団体に所属していると答えたメンバーの方が所属していないメンバーより多かった。活動を積極的に行う者はこのグループとは別の活動も積極的に行っていることが明らかになった。

表 13．他団体への所属について　（単位：人）

項　目	人　数
は　い	14
いいえ	10
無回答	2
総　数	26

活動を行う際にかかる経費の一つである「交通費」については，「ボランティア活動は無償が原則なのでためらいを感じる」と答えたメンバーとその他のメンバーの意見を含め「経費がかかるので当然」と答えたメンバーと二分されていた。その他の意見は以下の通りである。①「仕事に就いていないので収入がない。ボランティア活動をするのでせめて交通費の少しはあった方がよい」，②「ありがたくいただいています。時々『Ｆボランティア』に寄付をします」，③「自分だけが受け取らなければグループの和を乱すと考え受け取っている」，④「無償が原則だけど，受給されると助かる」，⑤「意思と時間はあるが，経済的な余裕がない」，⑥「ありがたく思っている」。

表 14．交通費の支給について　（単位：人）

項　目	人　数
経費がかかるので当然だ	5
経費がかかるので支給される交通費をもう少し増加	0
無償が原則なので，ためらいを感じる	14
無償が原則なのでやめるべきだ	0
その他	7
総　数	26

2－3．「F ボランティア」に対する満足感

次にメンバーの活動に対する考え方について述べる。表 15 によれば，会員たちは，「F ボランティア」に対して，ほとんどのメンバーが満足していることがわかる。

そして，少数であるが，3 名は，会に対して満足しておらず，その理由を「自分自身の活動に対する知識と技術の不足」，「ボランティア団体内の人間関係」，「団体の活動内容の問題」，「クライエントとの関係」などを上げている。

表 15．会に対して満足しているか　（単位：人）

項　目	人　数
とても満足している	3
満足している	20
満足していない	3
全く満足していない	0
総　数	26

表 16．「満足していない」その理由について　（単位：人）

項　目	人　数
自分自身の活動について知識と技術の不足	1
メンバーの活動に関する知識と技術の不足で	0
活動先の職員と関係	0
ボランティア団体内の人間関係	1
団体の活動内容の問題	1
クライエントとの関係	1
その他	0
総　数	4

またメンバーに「活動をやめたいと思ったことがあるか」については，ほとんどのメンバーが「活動をやめたいと思ったことはない」と答えている（表 17）。しかし少数だが，「メンバーとの人間関係の問題が生じた」，「体力や健康上の負担があった」，「時間がかかりすぎる」，「仕事が忙しくなった」との理由でやめたいと思ったメンバーがいることが分かった。また，やめたいと思ったメンバーの多くは，その時会員や家族，会のリーダー，友人に相談をしている。

表 17．やめたいと思ったことがあるか （単位：人）

項　　目	人　　数
は　い	9
いいえ	16
無回答	1
総　数	26

表 18．「活動をやめたいと思った」その理由について （単位：人）

項　　目	人　　数
思ったよりやり甲斐がない	0
時間がかかり過ぎる	1
費用がかかり，経済的に負担がある	0
家族の理解がえられない	0
体力や健康上の負担がある	4
仕事が忙しくなった	1
メンバーとの人間関係が生じた	4
ボランティア活動に興味がなくなった	0
家族の介護や看護	1
その他	0
総　数	11

やめたい時にやめなかった理由は，①休むことで了解してもらった。②一時的な理由でやめて後悔したくなかった。③会員が頑張っているので，もう少し頑張ろうと思った。④話合いの場を持った。⑤自分の目的とする活動に徹することにした。⑥仕事を解雇されたから。⑦心通じ合う友だちに話をしたら団体に所属した方がいろいろな内容のボランティアが出来るのでとアドバイスをもらった。⑧回数を減らしても活動が出来るし，役にたちたい，などが上げられていた。

今後もボランティア活動を続けるかについては，表 19 に示しているが，２名を除き，ほとんどのメンバーが，「今と同じように活動を続けたい」，残り３名は「今まで以上に積極的に活動を続けたい」と答え，多くが活動を今までと同様か，あるいはそれ以上に積極的に活動したいと考えていることがわかった。

表 19．これからの活動の継続について （単位：人）

項　　目	人　　数
今まで以上に積極的に活動を続ける	3
今までと同じように活動を続けたい	21
続けるが関わりをもっと減らしたい	2
続けたくない	0
総　数	26

ボランティア活動を続けたいその理由としては，「自分自身が成長できる」が最も多く上げられており，その次が「仲間・友人と一緒に活動を続けたい」，「活動が楽しい」，「感謝され，やり甲斐がある」である。メンバーがどのような点に「自分自身の成長」と「活動が楽しい」のかを検討する余地がある。一方「続けるが関わりを減らしたい」と答えたメンバーも数人いるが，その理由（表 20）として「人間関係に疲れた」ことが上げられ，会に満足している人の中にも「やめたいと思ったことがある」人がおり，また体力や健康上の負担や人間関係の問題が生じ悩んでいるメンバーがいることが明らかになった。メンバーの高齢化が進んでおり，会のリクルートを検討する必要性が生じていることがわかる。

表 20．活動を続けるその理由について（複数回答）　（単位：人）

項　目	人　数
自分自身が成長出来る	13
活動が楽しい	6
感謝され，やり甲斐がある	6
仲間・友人と一緒に活動を続けたい	9
この団体のメンバーでいたい	2
その他	4
総　数	40

2 － 4．「ボランティア組織」の学習

ボランティア活動を行う際に必要な学習について次に検討する。回答者のほとんどが研修を受けていると答え，研修を受けるメンバー全員が活動に役にたつと答えていた（表 21，22）。今後活動を行うために必要とする研修として，「ボランティアの理念と意義」を最も多くのメンバーが答えた（表 23）。つまり実践を行いながらも実践する中での戸惑いや欠けている知識や技術に気がつき，それを学習で補っていることがうかがえる。ボランティア活動が実践，学習を欠かせないものとして進められていることがわかる。

表 21．研修をうけているか　（単位：人）

項　目	人　数
は　い	16
いいえ	8
無回答	2
総　数	26

表 22．研修が活動に役にたっているか （単位：人）

項　目	人　数
とても役に立つ	8
多少役に立つ	8
あまり役に立たない	0
全然役に立たない	0
総　数	16

表 23．今後どんな研修が必要だと思うか（複数回答） （単位：人）

項　目	人　数
ボランティアの理念と意義	11
社会福祉の理念と意義	3
社会福祉制度についての知識	4
支援方法及び技術に関する専門知識	9
レクリエーションや趣味の活動に関する技術と指導法	3
社会問題に対する理解	3
ボランティアグループの運営に関すること	2
その他	0
無回答	3
総　数	38

「活動後の反省や評価の機会」の有無については，「行っている」と答えたメンバーが「行っていない」メンバーよりやや多かった。この点では，会のメンバーの意識が二分されていることが明らかになった。行っていると回答したメンバーのほとんどは一緒に活動したメンバーと反省や評価の話し合いをすると答えており，行っていないメンバーにも，その必要性を認めている者がいた（表 25）。「活動後の反省や話し合い」は，活動を行う際に必要な「支援方法と技術に関する専門知識」を身につける一つの方法であるとともに，活動を通して「自分自身が成長できる」ことを確認する重要な機会である。

表 24．活動後に反省や評価の話合はするか （単位：人）

項　目	人　数
行　う	13
行わない	10
無回答	3
総　数	26

表 25．「その必要性を感じるか」について　（単位：人）

項　目	人　数
とても思う	0
少し思う	10
あまり思わない	0
全く思わない	0
総　数	10

3．「F ボランティア」4 つの類型とその意義

分析対象である「Ｆボランティア」26 名を配布調査の結果にもとつき、「ボランティア組織」の運営に関わる「定例会・総会」の出席頻度や活動年数、活動の頻度により 4 つの類型に区分した。「定例会」は、主に社会福祉協議会から依頼された仕事について、毎月 1 回、翌月の活動の打ち合わせをし、またメンバーが計画的に活動できるように日程を調整・確認しつつ、活動先の情報を交換する集りである。また「総会」は、年に一度、前年度の活動に対する成果を確認し、報告を行うとともに年間活動の計画、年間予算案、運営スタッフを決めるもので、メンバーの活動に対する積極性の程度を表すものである。

この区分は，Scheier（1980）[16] が，ボランティア活動には，参加の度合による階層性（space）があり，「中心」（center），「周辺」（suburb），「外延」（planetary）に区分したことを参考にしたものである。「周辺」（suburb）は，活動をサポートする立場であり，「外延」（planetary）の活動は、強制的ではなく（uncoerced），他のメンバーを手伝う（intended to help）ことなどと説明している。

「Ｆボランティア」のコアメンバーはScheierの「中心」に該当し，会に対する活動の日程の調整・確認や打ち合わせをする役割を担っている。また，周辺Ⅰのメンバーが担っている役割と「周辺」の役割は類似している。周辺Ⅱ・外延は「外延」に相当し，活動に最低限に関わり，活動自体よりメンバーとの人間関係や親睦をより重視している。

表 26 ～ 27 である「定例会・総会」に対するコアメンバーと周辺Ⅰは，「いつも出席する」と答えており，周辺Ⅱは，「時々出席する」が「いつも出席」するより多い。また外延は，7 名のメンバーの中，3 名が「時々出席する」と一番多く，「いつも出席する」とそれ以外の意見に散らばっている。

活動年数は，コアメンバーが「7 年以上から 10 年以上」の長く活動に関わっており，周辺Ⅰは，他のグループより「Ｆボランティア」に入会してからの年数が短いことがわかる。また周辺Ⅱ・外延は，「1 年未満から 10 年未満」に散らばっている。

会の運営に関わる「定例会・総会」に出席して活動に対する積極性の程度をはかることができる「1 ヵ月の活動頻度」（表 29）は，コアメンバー・周辺Ⅰが周辺Ⅱ・外延より活動の頻度が多い。

表 26．「定例会」の出席頻度について （単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
いつも出席	6	7	2	2
時々出席	0	0	4	3
余りしない	0	0	0	1
全然しない	0	0	0	0
無回答	0	0	0	1
総　数	6	7	6	7

表 27．「総会」の出席頻度について （単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
いつも出席	6	7	1	2
時々出席	0	0	4	2
余りしない	0	0	0	1
全然しない	0	0	0	1
無回答	0	0	1	1
総　数	6	7	6	7

表 28．「活動年数」について （単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
1年未満	0	0	1	1
1～3年未満	0	4	1	2
3～5年未満	0	1	1	1
5～7年未満	0	0	2	2
7～10年未満	1	2	1	1
10年以上	5	0	0	0
総　数	6	7	6	7

表 29．「1ヵ月に何回の活動をするのか」について （単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
月1～2回	0	0	0	7
月3～4回	3	3	5	0
月5～8回	3	3	0	0
月8回以上	0	1	0	0
その他	0	0	1	0
総　数	6	7	6	7

以上のように，４つのタイプの特徴は以下のとおりである。

①「コアメンバー」：在籍・活動年数が長く，定例会や総会にいつも出席し，活動頻度が多いメンバー。
②「周辺Ⅰ」：定例会や総会にいつも出席し，活動頻度が多いメンバー。
③「周辺Ⅱ」：定例会・総会に時々出席し，活動頻度があまり多くないメンバー。
④「外延メンバー」：定例会・総会にあまり出席しない，出席しても活動にあまり積極的に参加しないメンバーである。

１）ボランティア活動の現状

（１）ボランティア活動のきっかけ・動機

ボランティア活動のきっかけや動機は，活動に臨むまえにどういう経路や何に関心を持ち行動に移行したのかを示す。田尾（1999）によるとボランティア活動の動機は，利他主義，内発的モチベーション，自己重視の３つに分けることができ，自己主義の動機には成長への意欲（＝自己実現）と利得の考えの２つの意味が含まれていると述べている。「Ｆボランティア」の活動のきっかけにおいては，４つのグループの差はあまり見られないが，「コア」，「周辺Ⅰ」，「外延」では「社会福祉に関連する研修会やイベントなど」，「周辺Ⅱ」は「社会福祉に関連する研修会やイベントなど」あるいは「社会福祉協議会のボランティアセンターで」知ったことをきっかけに活動に関わっている。特に「コアメンバー」は「その他」の回答として次のように述べている。①自分自身が勉強して入会した。②退職したらボランティア活動に参加しようと思った。③自ら社会福祉協議会に行った。これらの答えから「コアメンバー」は活動を開始する時点から，積極性を発揮していることが分かる。また４グループのメンバーたちの多くは，学習を通してボランティア活動を始めたことが分かる。また動機の方も，４つのグループに差異は見られない。「コアメンバー」，「周辺Ⅰ」，「周辺Ⅱ」では，「自分自身の学びや成長のため」，「外延」では，「自分自身の知識や経験を生かしたい」ことを動機に活動を始めていた。

これらは「Ｆボランティア」メンバーは社会福祉協議会が主催する講座に参加することを契機に活動に関わり，またボランティア活動を通して学習することを希望していることがわかった。

表 30．ボランティア活動のきっかけについて（複数回答）　（単位：人）

項　　目	コ　ア	周辺Ⅰ	周辺Ⅱ	外　延
周りの会員に誘われた	1	0	1	1
周りの人（友だちなど）に進められて	1	0	1	2
他団体の会員（団体）に進められて	0	0	1	0
本団体の広報物（ポスターやチラシ）を見て	0	1	0	2
社会福祉に関連する研修会やイベントなどで知って	3	3	2	3
社会福祉協議会のボランティアセンターで知って	0	2	2	0
インターネットで見て	0	1	0	0
その他	3	2	1	2
総　数	8	9	8	10

表 31．ボランティア活動の動機について（複数回答）　（単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
社会奉仕に参加したい	2	2	3	3
社会問題に関心があった	1	1	2	0
自分自身の知識や経験を生かしたい	1	1	0	4
余暇時間を活用したい	4	2	0	2
自分自身の学びと成長のため	5	5	6	1
新たな経験をするために	0	0	1	2
仲間や知人を得たい	1	0	0	0
周りの人（家族・知人）のすすめで	0	0	0	1
その他	0	1	1	0
総　数	14	12	13	13

（2）ボランティア活動の内容

活動内容においては，コアメンバー・周辺Ⅰと周辺Ⅱ・外延との差異が見られた。前者の方は，会が発足された際に定めた「ミッション」である「個別援助活動」を行っており，後者は「施設訪問・施設行事の手伝い」活動を行っていると回答していた。この特徴からみると，「個別援助活動」は，介護保険制度の導入以後のホームヘルパーが行う仕事を「Ｆボランティア」が行ってきた仕事であり，中心メンバーになるほど介護を必要とする高齢者や障害者の自立生活のための支援など重い責任が伴う活動に比重を置いていることが分かる。

表 32．ボランティア活動の内容（複数回答）　（単位：人）

項　　目	コ　ア	周辺Ⅰ	周辺Ⅱ	外　延
クライエント（高齢者・障害者）などの個別援助活動	5	6	2	1
施設訪問・施設行事の手伝い活動	4	4	4	4
美化活動（環境整備活動）	4	3	2	2
託児活動	0	1	0	3
事務及び業務補助活動	1	1	0	0
その他	0	0	0	0
総　数	14	15	8	10

（3）ボランティア理念と関わる交通費の支給について

交通費の支給に関わるメンバーの意見は，ボランティア原則のひとつである「無償性」をどのように理解するかということに関わっている。表 21 をみると，周辺Ⅱ・外延が「無償が原則なので，ためらいを感じる」と回答しており，コア・周辺Ⅰと異なる意見を持っていることがわかる。コア・周辺Ⅰは，「その他」の項目として意見を区分しているが，内容を概観すると，コアでは，①「仕事に就いていないので収入がない。ボランティア活動をしてい

るのでせめて交通費が少しはあった方がよい」，②「ありがたくいただいています。時々『Ｆボランティア』に寄付をします」，③「自分だけが受け取らなければグループの和を乱すと考え受け取っている」，周辺Ｉでは，①「無償が原則だが，受給されると助かる」，②「意思と時間はあるが，経済的な余裕がない」，③「ありがたく思っている」。これらのコア・周辺Ｉの「その他」の意見を合わせて考えると，ボランティア活動には経費がかかるのだから交通費の支給は当然であると考える者と，ボランティアは「無償性」を原則としているのだから自分が支給を受けるのにためらいがあると感じた者と二分されていたことが分かる。

表 33．交通費の支給について　（単位：人）

項　　目	コ　ア	周辺I	周辺Ⅱ	外　延
経費がかかるので当然だ	1	2	1	1
経費がかかるので支給される交通費をもう少し増加	0	0	0	0
無償が原則なので，ためらいを感じる	2	2	4	5
無給が原則なのでやめるべき	0	0	0	0
その他	3	3	0	1
無回答	0	0	1	0
総　数	6	7	6	7

（４）他団体への所属

「Ｆボランティア」以外の団体においても活動を行うのかについては，活動を積極的に行っているコアメンバーと周辺Ｉが他団体で活動を行っていると答えた。これは一つの団体に活発的な活動を行う人ほど，他の活動に対しても積極的に行っていることがうかがわれる。

表 34．他団体への所属　（単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
は　い	4	5	2	3
いいえ	2	1	3	4
無回答	0	1	1	9
総　数	6	7	6	7

２）「Ｆボランティア」に対する満足感・継続について

「ボランティア組織」に対しての満足度，つまり「ボランティア組織」中の活動内容，人間関係，雰囲気などは，活動に影響を及ぼす大事な要因の一つであるといえるだろう。組織に満足するほど，活動に継続的に関わり，積極性を発揮するのではないか。

「Ｆボランティア」のメンバーたちは４つのグループを問わず，ほとんどのメンバーが「ボランティア組織」に対して満足しており，特に「周辺Ｉ」の３名は「とても満足している」

と答えている。しかし，わずかであるが，コアメンバー，周辺Ⅰ，周辺Ⅱの各々１名が「満足していない」と述べており，その理由としてコアメンバー周辺Ⅰは「団体の活動内容の問題」，周辺Ⅱは「自分自身の活動に関する知識と技術の不足」であるとしている。このコアメンバーと周辺Ⅰの不満足の内容は，グループの「ミッション」とも関わるものであり，そもそも会の中心的な活動である「個別援助活動」が地域のニーズに応えることによる「施設への活動」に広げてきたことに対することであると推測される。

表 35．「Ｆボランティア」に対する満足について　（単位：人）

項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
とても満足している	0	3	0	0
満足している	5	3	5	7
満足していない	1	1	1	0
全く満足していない	0	0	0	0
総　数	6	7	7	7
満足していないその理由について				
コ　ア	組織の活動内容の問題			
周 辺 Ⅰ	組織の活動内容の問題			
周 辺 Ⅱ	組織内の人間関係			

また，活動をやめたいと思ったことがあるものは，４つのグループともに散見されるが，特に周辺Ⅰに他のグループより多い。その理由を挙げると，コアは，「体力と健康上の負担がある」，「メンバーとの人間関係が生じた」，「家族の介護や看護」，周辺Ⅰは，「時間がかかり過ぎる」，「体力と健康上の負担がある」，「メンバーとの人間関係が生じた」，「仕事が忙しくなった」，周辺Ⅱは，「体力と健康上の負担がある」，外延の「メンバーとの人間関係が生じた」，「体力や健康上の負担がある」が挙げられていた。これらの理由から注目される点は，会のメンバーの高齢化が進んでいることが示されており，また周辺Ⅰのメンバーに活動をやめたいと回答した人数が他のグループより多かったことは，ボランティア活動を積極的に関わりつつも活動の悩みを抱えていることが明らかになったことである。リーダーはこのこれらを参考にして組織を運営する際に留意すべきである。

表 36．活動をやめたいと思ったことの有無・その理由・やめなかったその理由について

（単位：人）

活動をやめたいと思ったことがあるか				
項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
いいえ	4	2	5	5
は　い	2	4	1	2
無回答	0	1	0	0
総　数	6	7	6	7

その理由	
コ　ア	①体力と健康上の負担がある。 ②メンバーとの人間関係が生じた。 ③家族の介護や看護。
周 辺 Ⅰ	①時間がかかり過ぎる。 ②体力と健康上の負担がある。 ③メンバーとの人間関係が生じた。
周 辺 Ⅱ	①体力や健康上の負担がある。
外　延	①メンバーとの人間関係が生じた。 ②体力や健康上の負担がある。
やめたくなかったその理由	
コ　ア	①休むことで了解した。 ②一時的な理由で後悔したくなかった。
周 辺 Ⅰ	①会員が頑張っているので，もう少し頑張ろうと思った。 ②話合いの場を持った。 ③自分の目的とする活動に徹することにした。 ④仕事を解雇されたから。
周 辺 Ⅱ	無回答
外　延	①心通じ合う友人に話をしたら団体に所属した方がいろいろな内容のボランティアができるからとアドバイスをもらった。 ②回数を減らしても活動が出来るし，役に立ちたい。

次に「Ｆボランティア」の活動への参加を継続するかは，活動に対する「満足感」，また会の活動をやめたいと思ったことがあるかという点に相関関係がある。「Ｆボランティア」メンバーのほとんどが会に対して満足しており，またやめたいと思ったことがない。これらの回答からも予想できるようにメンバーのほとんどが「Ｆボランティア」にて活動を継続する意向を持っているといえる。特徴的なことは，周辺Ⅰは，上記の項目である会に対して満足しながら，活動をやめたいと思いつつも，活動の継続については「今まで以上に活動を続ける」と答えている。これは，「自発性のパラドクス」（金子郁容），「ボランティア活動の辛さ」（筒井のり子），「不信と疲労の悪循環」（早瀬昇）などの指摘に示されているように悩みや困難にぶつかりながらも彼らが活動を続けていることがうかがえる。また活動を続けているその理由は，「コア」・「周辺Ⅰ」・「外延」は，「自分自身が成長できる」，「周辺Ⅱ」は，「感謝され，やり甲斐がある」，「仲間・知人と一緒に活動を続けたい」であった。

表 37．活動の継続と継続するその理由について　（単位：人）

「Ｆボランティア」にて活動を継続するか				
項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
いままで以上に積極的に活動を続ける	0	3	0	0
今までと同じように活動を続けたい	6	3	5	7
続けるが関わりをもっと減らしたい	0	1	1	0
続けたくない	0	0	0	0
総　数	6	7	6	7
続けるその理由（複数回答）				
項　　目	コ　ア	周 辺 Ⅰ	周 辺 Ⅱ	外　延
自分自身が成長できる	4	5	1	3
活動が楽しい	3	1	1	1
感謝され，やり甲斐がある	3	1	2	0
仲間・知人と一緒に活動を続けたい	3	2	2	2
この団体のメンバーでいたい	1	0	0	1
その他	2	1	0	1
総　数	16	10	6	8

3）「ボランティア組織」の運営について

（1）研修，反省・評価のきかい

生涯学習審議会答申（以下，答申とする）（1992）[17]は，生涯学習とボランティア活動の関係について，「①ボランティア活動そのものが自己開発，自己実現につながる生涯学習となるという視点，②ボランティア活動を行うために必要な知識・技能を修得するための学習として生涯学習があり，学習の成果を生かし深める実践としてボランティア活動があるという視点，③人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって，生涯学習の振興が一層図られる」という３つの視点から捉えられるとしている。この答申（1992）に示唆されたと思われる長沼（2008）[18]は，ボランティア活動と学習の関係を①ボランティア活動のための学習，②ボランティア活動についての学習，③ボランティア活動による学習であると述べており，また①を学習の目的，②を学習の対象，③を学習の手段であるとしている。ここで考察する研修は，答申（1992）の中で捉えている視点②「ボランティア活動を行うために必要な知識・技能を修得するための学習」であり，長沼（2008）の①ボランティア活動のための学習である。また反省・評価の機会を設けることについては，実際に活動を行う中，生じた多様な出来事について検討・振り返り・認め合う契機になる。

「Ｆボランティア」における研修や反省・話し合いの機会を持つことについては，４つのグループに差が見られた。

コアメンバー・周辺Ⅰが周辺Ⅱ・外延より多く取り組んでいる。また「研修を受けている」と回答したメンバーの全てが研修を受けることが活動に役に立っていると答えた。これは活動を通して生じるいろいろな悩みや困難に対して研修を受けながらそれらの問題を解決していることがうかがえる。

また反省・評価の機会についても，コアと周辺Ⅰがその他のグループのメンバーより多いことがわかる。これは長沼（2008）が指摘した②ボランティア活動についての学習を通して自己・他者・社会について理解することができ，また社会的有用感や自己肯定感が得ることができるということに通じる。また反省・評価の機会を行わない周辺Ⅱ・外延のメンバーの全員がその必要性を感じていると回答している。

表 38．研修をうけるか・それが活動に役にたつか　（単位：人）

研修は受けるか				
項　　目	コ　ア	周辺Ⅰ	周辺Ⅱ	外　延
は　い	5	6	2	3
いいえ	1	1	2	4
無回答	0	0	2	0
総　数	6	7	6	7
研修が活動をするのに役たっているか				
項　　目	コ　ア	周辺Ⅰ	周辺Ⅱ	外　延
とても役にたつ	2	3	1	2
多少役にたつ	3	3	1	1
あまり役にたたない	0	0	0	0
全然役にたたない	0	0	0	0
総　数	5	6	2	3

表 39．反省や評価の話しあいは行うか　（単位：人）

反省や評価の話しあいを行っているか				
項　　目	コ　ア	周辺Ⅰ	周辺Ⅱ	外　延
は　い	4	5	2	2
いいえ	2	2	2	4
無回答	0	0	2	1
総　数	6	7	6	7
行わないと回答した人はそれが必要だと思うか				
項　　目	コ　ア	周辺Ⅰ	周辺Ⅱ	外　延
とても思う	0	0	0	0
少し思う	2	2	2	4
あまり思わない	0	0	0	0
全然思わない	0	0	0	0
総　数	2	2	2	4

4．4類型の面接調査

面接調査の項目内容は，第1に「ボランティア組織」の「ミッション」と関わるボランティア活動の内容であり，第2に，ボランティア組織を継続的に維持・運営する際にかかる資金としての「交通費」について，第3に「ボランティア組織」のメンバーの確保と拡大の「リクルート」，第4に，ボランティア活動の実践のための「学習」である。面接調査の対象としたメンバーは「コア」4名，「周辺Ⅰ」3名，「周辺Ⅱ」3名，「外延」3名である[19]。

これらの特徴を総括として示したのが表40である。

1）「ボランティア」の「ミッション」

「Ｆボランティア」の設立当時の目的は，「個別援助活動」が中心であったが，「Ｔ区のＫ病院」から独立（1998），また介護保健制度のスタート（2000）を節目に，施設ボランティアや地域の福祉イベントなどへの関わることが多くなり，会の目的的変化を余儀なくされるようになった。これらの変化について4類型の間では捉え方に差が見られた。

コアメンバーは当然，そのような事態に対応して自らグループとしてのミッションの見直しを進めてきたひとたちであり，個人援助から活動分野を広げて，地域の多様な福祉ニーズに応えていくことが必要なことであると考えている。しかし，発足当時からのメンバーも多く，会としては依然在宅の個人援助が重要な活動目的であると考えている。この中には，もっと積極的に個人援助を進めていくためには，ＮＰＯ法人としての認定をうけ，介護保険のホームヘルプサービスの指定業者になることなどを視野に入れている者もいる。この点ではコアメンバーの中に意見の違いが生まれている。

周辺Ⅰは，活動の範囲が広がって，施設ボランティアなどが重要になっていることを当然として受け止めている者と施設ボランティアよりも在宅の個人援助活動に満足感を感じるという者に分かれた。

周辺Ⅱは，施設ボランティアの方が個人援助よりも楽しいという者と在宅個人援助を自分はやっていきたいという者とに分かれた。

外延は，入会当初から現在まで，会の目的を理解していないままでいるメンバーがほとんどであった。これは，会の方針について意見を述べるよりは自分の活動はそちらに重点を置きたいという個人本位の考えにもとづき答えているのであり，会全体が「ミッション」をどのように定め，活動の重点を施設か個人に置くべきかについてはどちらかと言えば無関心であることが分かる。

以下は面接調査の内容である。

「ＮＰＯ法人取得が必要」

A「介護保険制度の導入の前は，個別援助活動が多かったが，それの導入によって個別援助活動が減っていた。会の目的通り活動をするためには，ＮＰＯ法人を取って，地域の援助を求める個々人を集めること，また「Ｆボランティア」メンバーたちが援助すること，つまりこれからは集団対集団として活動を援助していかないと成り立たないと思いますね。」

表 40．「Ｆボランティア」　メンバーの類型　総括表

類　型	特　徴	ミッション	重視する活動	ボランティアの理念	リクルート	学　習
コ　ア ＡＢＣＤ	・定例会や総会にいつも出席し，在籍・活動年数が長く，活動頻度が多い	・在宅の個別援助から施設訪問・施設行事への支援の変化を肯定的に受け止める（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ） ・個人援助活動を中心にやっていくためにはＮＰＯ法人の認定をうけた方がよい（Ａ）	・活動が広がるのはやむをえないが，会としては**個別援助活動が重要であると考えている**	・余暇時間を利用して活動をするので交通費が少しはあった方がよい ・ありがたく頂き，時々会に寄付をする ・自分だけが受け取らなければ会の和を乱す**〔経費の支給は当然だと考える者が多い（配布調査）〕**	・個人援助をするには 50 代の会員が増えてほしい（Ｂ） ・特に 40 代，50 代の活動できる会員を増やしたい。名前だけの人が残っている（Ｃ） ・会員を増やしたいが難しい。負担を大きくしないためには活動を増やさない（Ｄ）	・ボランティアの本質，多様化した利用者を受け入れられるように人間を理解できるようにすること，実践学，家庭料理，家庭医学（Ｂ） ・介護保険，認知症（Ｃ），会員にも学習してもらいたい
周辺Ⅰ ＥＦＧ	・定例会・総会にいつも出席し，活動頻度が多い	・個別援助はボランティアがやれる範囲が狭まった。高齢社会の深化により，活動が広がっていかざるを得ない（Ｅ・Ｆ），**ミッションの見直しが必要**（Ｅ） ・施設ボランティアが多くなっていることには納得するが本来中心だった個人援助活動が満足感を得られる（Ｇ）	・活動の広がりをむしろ肯定的にとらえ，**施設ボランティアを重視**する（Ｅ・Ｆ） ・施設ボランティアより，個別援助活動により満足感を感じる（Ｇ）	・無償が原則だが，受給されると助かる ・意志と時間はあるが，経済的な余裕がない ・ありがたく思っている **〔配布調査では経費がかかるので当然だと考える者が多い〕**	・会員を増やすべきだと思う。現在の会員は高齢化。施設の介助には男性の会員が必要（Ｆ） ・中心メンバーが決めることだが，今の会員でやりくりし，会員のレベルを高めること（Ｇ）	・手話，外国語の学習（Ｅ） ・自分自身が高齢化するので，ボランティア活動を継続するためには傾聴ボランティアを学びたい（Ｇ）
周辺Ⅱ ＨＩＪ	・定例会・総会に時々出席し，活動頻度が余り多くない	・自分は会の趣旨を十分に理解せずに入会した（Ｉ・Ｊ） ・自分は入会する前から在宅援助をやってきた。在宅個別援助が増えれば自分の活動頻度は増える（Ｈ）	・個別援助より施設活動の方が楽しい（Ｊ） ・在宅個別援助をむしろ増やすべき（Ｈ）	**〔無償が原則なので，交通費の支給を受けることにはためらいを感じると答えたものが多い（配布調査）〕**	・増やしてもよいが，これ以上会員を増やしてもまとまりが出来なくなる（Ｈ） ・増やさないほうがよい。（増えても）活動の譲り合いが生まれる（Ｉ） ・穴を埋める役割を果たす人がいればよいが難しい。現状を維持した方がよい（Ｊ）	・人の和をつくる，人とのつきあいの方法（Ｈ） ・自分の考え方や気持ちを伝える方法（Ｉ）
外　延 ＫＬＭ	・定例会・総会に余り出席しない，出席しても活動にあまり積極的に参加していない ・すべて女性	・個別援助が本来の役割だったはずで，満足感も感じるが，施設援助が増えてきたことはやむをえない（Ｋ） それはそれでいい（Ｌ） ・会の目的を理解しないで入会した（Ｍ）	・**施設援助が増えていることは当然，そのようなことが当たり前の状況のなかで入会**	**〔無償が原則なので，交通費の支給を受けることにはためらいを感じると答えたものが多い（配布調査）〕**	・名前だけの会員が増えると困る。今の人数でよい（Ｌ） ・会員は多いほうがよいが，会員同士気があわないこともあり得る。自分を出さない控えめの人が入ってほしい（Ｍ）	・調理実習，施設見学（Ｌ）

「ミッションの見直し」

B「介護保険制度が導入され，ホームヘルパーがポプラになってきましたよね。それが原因になり，ボランティアへの援助が必要にならなくなった人が多くなってきました。しかし，まだボランティアの援助が必要としている人がいるのではないかと思うし，その利用者への援助が出来ることがあったら対応していくつもりです。」

C「いままでやっていた利用者が年をとってボランティアが援助するのに難しくなり，なくなりました。また介護保険の導入によりボランティアができる範囲以上の利用者が多くなったし，さらにメンバーの高齢化になって体力の低下などまた，メンバーの中には利用者を援助するのが好ましくないと思われるらしいです。施設などの２～４名のメンバーとペアになって一緒に活動するのを求めるメンバーが増えてきています。それで会はこのままで続け維持しても良いのではないかと思われますよ。」

D「個別援助の場合は，家族や親戚が世話をする傾向になっていると思いますね。そこでその代わりにグループが施設や地域の方の参加頻度が増えていると感じられますし，また個人の家庭に訪問するのは難しいし，希望する内容も難しくなっています。会のこのような状況は，社会変化の傾向に合わせていくことであると思います。グループ自体は，個人援助を自ら探しにいく必要はないと思いますね。」

E「介護保険制度の導入により，公で賄える範囲が広くなっており，ボランティアが出来る範囲が狭くなってきた。社会の変化により会の活動領域も変わっていくのも当然のことであると思う。しかし本来の会の趣旨通りに個別援助を増やした方がよいが，今現状をみると増えないと思われるから，会の維持のために主旨を変えた方が良いと思います。」

F「「Ｆボランティア」の目的について理解していない。高齢社会になっているし，社会にもいろいろ手助けを求める人が増えているから，現在のままで良いのではないかと思いますね。」

K「会の最初の目的が在宅援助のために立ち上がったので，できれば本来の主旨の方に取り戻したらと思います。しかし，流れに任せて援助が出来るところがあったら援助し，現在のままでも良いと思われます。個別援助に中心をおいて活動をしてきたが，個別援助が少なくなっている傾向に変わっているから，現在は施設の活動をしています。」

「軌道修正」

G「中心メンバーから，こういう傾向になっており，それで最初の主旨に軌道修正しよとしていることを聞きました。自分もそれについて納得しました。自分も施設や地域の行事の活動より個別援助のボランティア活動をすることによって利用者の喜んでいることや援助してもらい満足している感情が見えてくるから自分としても個別活動に満足感を感じる。」

H「自分は入会する前から，地域の人の在宅ボランティアをやっていた。それで，「Ｆボランティア」に入会してからも主に在宅援助ボランティアをやっていたが，援助する活動先が減っていて自分もお手伝いすることがなくなった。在宅の援助するところが増えたら活動の頻度が増えるのではないか。」

「会の運営に関わりなし」

Ｉ「「Ｆボランティア」の目的を理解していない。周りの人から誘われて入会しているし，会に深く関わっていない。」

Ｊ「会の趣旨を理解していない。やはり時代の流れに応じることになるから当然のことである。個人的にも個別援助より施設への活動が楽しい。その理由は，トラブルが起きる際に解決出来るからである。」

Ｋ「会の最初の目的が在宅援助のために立ち上がったので，できれば本来の主旨の方に取り戻したらと思います。しかし，流れに任せて援助が出来るところがあったら援助し，現在のままでも良いと思われます。個別援助に中心をおいて活動をしてきたが，個別援助が少なくなっている傾向に変わっているから，現在は施設の活動をしている。」

Ｌ「別にそれはそれでいいと思います。」

Ｍ「会の目的を理解していないで入会した。枠を決めるのではなく，自分ができる範囲でやりたい。それで，個人，団体を問わずさせてもらったら幸せだと思う。しかし，在宅の援助も減っているし，また障害者の支援制度が変わり，支援センターの活動が中止になっているため，当分は活動を休みたい。」

２）ボランティアの理念　（４類型の配布調査をもとに（表 33））

交通費の支給に関わる会員の意見は，ボランティアの理念の一つである「無償性」をどのように理解するか，ということに関わるものである。会としては，ボランティア活動には，経費がかかるのだから交通費の支給は当然であると考える（したがって，そのための財源を確保することが会の運営にとって極めて重要な課題となると考える）者と，ボランティアは「無償性」を原則としているのだから，自分が支給を受けるのにはためらいがあると感じている者とに二分されており，コアメンバーには，支給を当然とする者が多いが，周辺Ⅰでは二つに意見が分かれており，周辺Ⅱ，外延では支給されることにためらいを持つ者が多くなる。これはコアメンバーから離れるとともに会の運営自体には無関心になることと関わっていると思われる。ボランティア理念に関わる重要な意見の相違であり，会の中できちんと議論することが重要である。

３）リクルート（会員の確保と拡大）

コアメンバーは会員の拡大が重要であると考えている。個人援助が会として重要な役割だと考えているので，それを継続的に取り組んでいくためにも 40 代，50 代の比較的若いメンバーの確保が重要だと考えているのである。ただし，そのような会員の確保が困難なので，これ以上活動を広げることにより，現在の会員一人の負担を増やさないようにしようと考えるコアメンバーもいる。

周辺Ⅰ，周辺Ⅱ，外延には，これ以上会員を増やさないでやっていこうという者が多くなる。特に周辺Ⅱ，外延では，現在の会のまとまり，人間関係を大切にしたいという意向の強さがうかがわれ，これ以上会員を増やさないほうが良いという者が多い。会での人間関係の魅力に会に関わる意義を認め，新しい会員が増えることによりせっかく出来上がっている人間関係や，まとまりが壊れることに不安を持っていることが分かる。

「Ｆボランティア」のリクルートに関する面接調査は以下の通りである。

「メンバーを増やすべきだ」

B「現在，メンバーの家庭の事情で，活動を減らしている人がいる。年齢はかまわないが特に個別援助を行うのに一番適当な年齢だと思われる 50 代のメンバーが増えて欲しい。」

C「もっと増やしたい。特に 40 － 50 代の若い人，活動が出来る人が入ってほしい。メンバーは 40 人ぐらいいるが名前だけが残ってあり，全然活動をしない人がいる。新しく入会した人は現在活発的に活動をやっている。」

F「メンバーを増やすべきだと思う。現在のメンバーが高齢になっていて介助される立場に近づいている。特に男性のメンバーが少ない現状を見ると，施設の介助に行く時に車いすの仕事があるから男性のメンバーが増えたらと思う。」

H「増やしてもよいが，だれでもがよいではないと思う。ある程度の常識を持ったメンバーが増えればと思う。」

K「活動の領域にメンバーが固定されていると思うし，メンバーの全体が活動に参加しないように感じる。またメンバーの高齢化により，これからは活動が出来なくなる人が増えていくことから新しいメンバーを増やすべきであると思う。それによって活動先へのメンバーのやりくりが上手くいくと思う。」

「メンバーを増やさないほうがよい」

D「過去比べると活動の数が 2 － 3 年間にかけて増えてきた。まず依頼の活動の内容を役員やグループが検討して，家族とか子どもに委ねてもらえる内容の活動はカットしており，メンバーの負担を多くせずに現状維持できる範囲に収めることにしている。個人的にもメンバーを増やそうと努力はしているけど，なかなか増えない。」

E「増やさないほうが良い。入っても活動をするメンバーは限られている。これ以上メンバーを増やしたら無駄だし，まとまりが出来なくなると思う。もし，メンバーの体力が落ちていると思うから増やすとすれば，40 代の女性や男性が入って欲しい。」

G「これについての意見はない。これは中心メンバーの方針によって決めるものではないかと思う。メンバーの人数を増やすか増やさないかは問題にならないと思う。メンバーが沢山いても活動に参加できない人がいるとメンバーが少ないのも同じではないか。したがって今入っているメンバーをいかにやりくりできるのか，またメンバーのレベルを高めるのかが問題ではないかと思う。」

I「増やさないほうがよい。活動を譲り合うことも見えてくるから今のメンバーで十分ではないか。あまり関心がない。」

J「穴を埋める役割を果たす人がいれば良いが，現状を維持したほうが良い。」

L「メンバーを増やしても，活動に積極的に関わるメンバーが増えればよい。名前だけを名簿に載せられるメンバーが増えると困る。今の人数でよいではないか。」

M「メンバーは多ければよいと思う。が，メンバーが多くなればメンバー同士の気が合わない事もあり得るし，いくつかのメンバーの固まりが出来るから，それを解決するのが難しいと思う。特にメンバーの中でも自分を出さない，控え目な人が入って欲しい。自分の意見を出し過ぎると周りが違和感を感じる。またボランティアは誰もが出来ることだけど，ボランティア活動が出来るような人が入ってほしい。」

4）学　習

コアメンバーは，会員全体が学習すべき課題を考えており，会としてのボランティア活動をさらに発展させるための理論やスキルを理解，習得することが重要だと考えている。

周辺Ⅰは，今後の自分自身のボランティア活動のために必要な知識やスキルを重視していることがわかる。会としての学習課題ではなくあくまでも自分自身の要望を述べている。

周辺Ⅱ・外延では，人間関係やコミュニケーションについての学習の要求が強い。会の人間関係やまとまりを重視するものであり，これは会員の確保・拡大についての意見とも照応している。

学習については，コアメンバーとその他のタイプでの違いが目立つ。学習についてリーダーであるコアメンバーが，会員の間で学習についてのニーズのこのような違いがあることを理解することがまず必要である。

学習についての４つのグループの意見は以下のようになる。

「これからの学習について」

B「ボランティアの本質（実践学と少しの知識），一回だけではなく，繰り返し勉強する必要がある。また利用者の多様により，それの受け入れるための人間としての勉強が必要ではないかと思う。具体的にいうと自分の人間的な面の深さが問われるからキャパスティに関わる勉強。家庭料理，家庭医学，メンバーにもこのような学習が必要だと思うし，研修に参加できるようにしている。」

C「介護保険制度と認知証について学習したい。メンバーにも同じようなことを学習してもらいたい。」

E「活動をするうちに耳が聞こえないお年寄りや託児のお母さんに必要になるかと思って手話を習った。これからは札幌にも外国人が増えているから語学を習いたいと思う。」

G「年齢のこともあるから，体力を使うボランティアではなく，これから自分が出来るような傾聴ボランティアに対する学習をしたい。ボランティア活動をする前に，まず研修を受けてから活動をしたほうが良いのではないかと思う。」

H「人との和を作れるような学習。また人との付き合い方法など。」

Ⅰ「いつになっても学習は必要である。特に精神的なこと。自分の考え方や気持ちを伝える方法。」

K「個人援助ボランティアに対しては，人の接し方や付き合い方について学習したいと思う。」

L「調理実習（理論ではなく実践），施設見学など。」

5．総　括

以上の「Ｆボランティア」メンバーの４類型化を通して「ボランティア組織」の「継続性」についてどのようなことが言えるのだろうか。

まず，「ミッション」については，「Ｆボランティア」の発足当初の主な目的は，高齢者や障害者を対象にする個別援助を中心に活動することであったものが，地域の福祉の多様なニーズに応えるためにその活動の範囲を広げてきており，そのことは「ミッションの見直し」にもつながるような活動の変化をもたらしてきた。その結果として会員の間に「ミッション」

に関わる２つの意見の違いあるいは対立が現れるようになった。

コアメンバーと周辺Ⅰメンバーは，会の発足当初と活動を取り巻く社会的条件の変化，とりわけ介護保険制度の開始により，ホームヘルパーの派遣が広がる一方でボランティアに求める役割も変わってきたことに応じ「ミッションの見直し」が必要だと考えている。一方，周辺Ⅱ・外延では「ミッション」について特に意見を表明することはない。活動を積極的に取り組んでいるメンバーたちは会の目的を絶えず意識しながら運営と活動を行うのに対し，周辺Ⅱ・外延は，会の運営には余り関心を持っておらず，運営の責任はリーダーに任せて活動だけをすればよいと考えているからであると思われる。従ってリーダーは，その事実をしっかり認識すべきである。

またボランティアの「無償性」という原則とも関わる「交通費」の支給については，活動を積極的に取り組んでいるコアメンバー・周辺Ⅰメンバーのほうが経費の支給について肯定的に捉えていることが明らかになった。この「交通費」の支給についても意見が二分されていることは，ボランティアの理念に関わる認識が会として一致していないことを示すものであり，リーダーたちには，会員の意識の違いを把握し，会全体で議論すべき課題がある。

次に「Ｆボランティア」のリクルートについては，2005 年現在「Ｆボランティア」は活動経歴の長い会員が多くを占め，メンバーの高齢化が進んでおり，また新しいメンバーがなかなか入会していないことが見られた。このような現状に対してボランティアのリクルートにおいても，コアメンバーと３つの他グループのメンバーたちとの意見が異なっていることが明らかになった。

最後に，学習についても，コアメンバーと周辺Ⅰ・周辺Ⅱ・外延メンバーとの差が目立つ。コアメンバーが会の運営のための学習を求めていることや周辺Ⅰの自分自身のボランティア活動のための知識やスキルを希望している反面，会に対する満足感も持ち，やめることも考えていない周辺Ⅱ・外延の求めるのは，会において活動を続けていくための基礎となるような利用者とメンバーとの人間関係に対する学習であることがわかった。周辺Ⅱメンバー・外延メンバーにとって，人間関係の悩みや関心がより重要であることが明らかになった。

ボランティア活動をやめたいと思う理由に人間関係の問題があったり，またやめるのを思いとどまった理由として会の仲間の存在が挙げられていることを踏まえると，会のリーダーの役割を果たすコアメンバーは，周辺メンバーのこのような考えを理解する必要がある。

以上「Ｆボランティア」の「ミッション」・「リクルート」・ボランティア活動の理念，そして「学習」に対して検討してみたところ，コアメンバー・周辺Ⅰのように活動を熱心に取り組んでいるメンバーほど会全体のことを考え，ジレンマや悩みを抱えこむ可能性が大きいことが明らかになった。周辺Ⅱ・外延は，逆にそういう困難などを抱え込むことなく活動を継続していく可能性があること，また会としてのまとまりや良好な人間関係を求めていることがわかった。そうした意見の不一致や対立に気付き，会全体でお互いの意見や不満を出し合い，それぞれの立場や思いを理解しあう機会をつくることがコアメンバー（リーダー）に求められていることが明らかになった。

注

1 中島充洋『ボランティア論』中央法規出版，1999 年，23 ～ 28 頁
2 韓国ボランティア団体協議会『韓国ボランティア団体の現況研究調査』2001 年 16 ～ 17 頁
3 イ　ソンロク『ボランティアのアドバイス』メディアの森，2005 年　32 頁
4 田中弥生『「ＮＰＯ」幻想と現実』同友館，1999 年
5 大阪ボランティア協議会編『ボランティア参加する福祉』2000 年，31 ～ 32 頁
6 内海・入江・水野『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社，1999 年，43 頁
7 桜井政也『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房，2007 年
8 低所得層の自立能力を養い彼らを中産階層へ誘導することをねらいとして，地域における社会問題を予防・解決し，地域住民の連帯感と福祉の推進を図るための総合福祉センター。
9 田中弥生『「ＮＰＯ」幻想と現実』同友館，1999 年
10 金子郁容『ボランティアーもう一つの情報社会』岩見新書，1992 年
11 筒井のり子『21 世紀の市民社会を創るキーとなる職業，ボランティアコーディネーター』筒井書房，2000 年
12 早瀬昇「『市民社会』の姿と『市民社会』作りに関わるボランティアコーディネーターの役割」全国ボランティアコーディネーター研究集会 2000 年実行委員会編『一歩前へ！ボランティアコーディネーター』筒井書房，2000 年
13 厚生労働省によれば，全国の社会福祉施設総数は，1990 年（平成 2 年）に 51,006 施設だったのが，2003 年（平成 15 年）86,270 施設，2004 年（平成 16 年）現在は，90,098 施設になり，2003 年と比べると 3,746 施設の 4.3 ％が増加している。また定員数は，1990 年の 2,566 ,963 名が，2003 年に 3,025,570 ，2004 年に 3,114,542 名で，88,972 名が増加，2.9 ％が増加した。厚生労働省「平成 16 年社会福祉施設調査」2005 年
14 （社会福祉法人）全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動者実態調査」2001 年，1 頁
15 田尾雅夫『ボランタリー組織の経営管理』有斐閣，2001 年，53 頁
16 Scheier,, I. H. Exploring Volunteer Space ,Boulder, Conn.：Volunteer National Center For Citizen Involvement，1980，7 ～ 9 頁
17 生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」1992 年
18 長沼豊『新しいボランティア学習の創造』ミネルヴァ書房　2008 年
19 ４類型のメンバーを「Ｆボランティア」の入会から 2006 年現在までの在籍期間を参考にしてローマ字のＡからＭまで，コアメンバー：Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ。周辺Ⅰ：Ｅ，Ｆ，Ｇ。周辺Ⅱ：Ｈ，Ⅰ，Ｊ。外延：Ｋ，Ｌ，Ｍに区分した。また，ＡからＭまでの「　」の中の文章は，面接調査のテープ起こしをしたメンバーの会話体のそのものである。